

巻 頭 言



災害時に大学が提供できるもの — 東日本大震災に学ぶ —

宮城学院女子大学学長

海 野 道 郎

Michio UMINO

東日本大震災から1年、どの会合に行っても震災への言及から話が始まる。2011年3月11日は、われわれにとって、それくらい大きく重い出来事だった。

私が所属する宮城学院女子大学は、創立125年を超すキリスト教主義女子大学である。仙台市北部の里山を切り拓いた現キャンパスは、広い芝生を赤煉瓦の建物と回廊が囲んでいる。築後30年の建物は、外壁の煉瓦や体育館の天井などに被害が出たが、構造体自体には被害が及ばなかった。最大の被害は、2台のパイプオルガンだったかもしれない。だが、それも職人たちの奮闘によって生き返り、蘇った音色が礼拝の場を豊かに支えている。

ボランティア精神がキリスト教国から生まれたことから推察できるように、宮城学院女子大学でもボランティアが盛んである。震災後には、以前から存在したボランティア活動だけでなく、新たな活動も数多く生まれた。教員と学生が共同で、大震災復興コンサートやチャリティー・コンサート（音楽科）、「食のほっとタイムプロジェクト」（食品栄養学科。被災者への食事支援）、「わらすっこプロジェクト」（児童教育学科。幼稚園・保育所への教材などの配布や子供たちの活動支援）、さらには、人間文化学科や国際文化学科所属の教員と学生たちによる歴史資料や文化財の救出・保存、博物館ツアー、被災者に対する聞き取り調査や被災者を交えた討論会など、多くのプロジェクトは学生の専門を活かしたものだ。個別大学を超えた動きもある。国際基督教大学などと連携し、被災者からの相談や被災者の支援者からの相談に対応する「心理・教育臨床センター」を立ち上げた。また、「学都仙台コンソーシアム」を基盤として、災害からの復興に必要な素養を身に付けた学生を育成しようという「復興大学コース」が4月からスタートする。

こうした活動以外に特筆すべきなのは、施設の提供である。仙台市内の主要な大規模ホールは、すべて、震災被害のために半年近く使用不能になってしまった。そのような状況の中で、1,500席の大学講堂を宮城学院女子大学が非営利団体に提供して音楽会や演劇公演が行われたことは、市民にとって大いなる慰めになったものと思われる。

災害時に大学が提供できるものには、専門的知識・技術や若い学生の力だけでなく、建物などの物理的空間でもあることを、今回の震災は気づかせてくれた。

略 歴

海野 道郎 (うみの みちお) UMINO, Michio

生年月日 1945年1月17日

学 歴

1968年3月 東京大学工学部工業化学科 卒業
 1970年3月 東京大学大学院工学系研究科工業化学専門課程修士課程修了
 1972年3月 東京工業大学大学院理工学研究科社会工学専攻修士課程修了
 1973年5月 東京工業大学大学院理工学研究科社会工学専攻博士課程中退

職 歴

1973年6月 東京工業大学助手
 1976年4月 関西学院大学社会学部専任講師
 同助教授、教授を経て
 1984年4月 東北大学助教授 (文学部社会学科行動科学基礎論講座)
 1991年4月 東北大学教授 (文学部社会学科行動科学基礎論講座)
 2001年4月 評議員を併任
 -2004年3月
 2008年3月 国立大学法人 東北大学教授 (大学院文学研究科) を定年退職
 2008年4月 国立大学法人 東北大学総長特命教授
 2011年4月 宮城学院女子大学 学長

学会活動

日本社会学会 (理事・社会学評論編集委員長、財務理事)
 東北社会学会 (庶務委員長、理事・研究活動担当、会長)
 数理社会学会 (研究理事、編集理事、副会長、会長)
 環境社会学会 (事務局長、機関紙編集委員長、会長)